

報文

幼稚園教育要領の改訂に関する5領域からの検討

—柴田学園大学短期大学部保育科の事例—

蝦名 敦子、今 和香子、佐々木 美子、笹森 雅子、工藤 里砂子

柴田学園大学 短期大学部 保育科

Examining Revision of the National Curriculum Standard for Kindergarten through Five Perspectives:
A Case Study from the Department of Early Childhood Education,
Shibata Gakuen University Junior College

Atsuko Ebina, Wakako Kon, Yoshiko Sasaki, Masako Sasamori, Risako Kudo

Department of Early Childhood Education, Shibata Gakuen University Junior College

Key words : 幼稚園教育要領 the National Curriculum Standard for Kindergarten
5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)
the Five areas (Health, Human relationship, Environment, Language, Expression)
授業研究 class studies
幼児教育 early childhood education

要旨

本考察は新幼稚園教育要領の5領域の改訂部分に注目し、各領域からの取組みについて検討したものである。本大学短期大学部保育科の担当教員による共同研究で、5領域を今和香子(健康)、佐々木美子(人間関係)、蝦名敦子(環境と総括)、笹森雅子(言葉)、工藤里砂子(表現)が担当した。5領域から具体的にその取組みや見解について論じ、実践等を振り返りながら、今後の本学における新幼稚園教育要領の改訂部分に関する対応について明らかにした。またその結果、本学の保育科の授業をより充実させる上で、次の2点の課題が抽出された。① これらの実践から得られた結果を踏まえ、さらに効果的な授業内容として今後、改善を図っていくこと、② 領域を連携させるなどして、協働の授業を試みること、である。

はじめに—考察の目的と方法論

本考察は、新幼稚園教育要領の特に5領域の改訂部分に注目し、それぞれの領域からの実践的な取組みについて検討したものである。柴田学園大学短期大学部保育科の担当教員による共同研究であり、5領域をそれぞれの教員—今和香子(健康)、佐々木美子(人間関係)、蝦名敦子(環境と総括)、笹森雅子(言葉)、工藤里砂子(表現)が担当した。

5領域から具体的にその取組みや見解について論じ、実践等を振り返りながら、今後の本学における新幼稚園教育要領の改訂部分に関する、対応

について明らかにする。そのことが本考察の目的である。改訂箇所の内容の違いにより、各領域で取り上げた実践の趣旨は異なっているが、次のプロセスで論じられている。1. 各領域の改訂部分から注目した点を明らかにし、2. その取組みについて、実践を踏まえて検証する。あるいは、今後の授業実践に向けて方針等を導き出す。3. 全体的に振り返ってまとめとする。

実際に授業で試みた事例が取り上げられたのは、領域「健康」、「環境」、「表現」である。「人間関係」は今後の授業実践に向けて検討した内容となって

いる。また領域「言葉」では、学生が選書した絵本の特徴をアンケートから分析した。本考察では、5領域の内容の改訂部分を、実際の本大学の授業にどのように反映させたか、またその結果が明らかにされる。あるいは学生の実態や、これからどのように授業に反映すべきかが検討される。最後に各領域から検討した内容を総括する。以下の構成からなる。1. 新幼稚園教育要領の改訂ポイントについて、2. 5領域の取組みについて、(1) 健康、(2) 人間関係、(3) 環境、(4) 言語活動、(5) 表現、3. 5領域からの検討と課題、である。

1. 新幼稚園教育要領の改訂ポイントについて¹⁾

今回の改訂では、資質・能力の三つの柱「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」が小・中・高校と同様に、幼児教育においてもその理念が一貫して統一された。新たに打ち出された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育要領の第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿が示された。教師が指導を行う際に考慮すべきものとされる²⁾。それに合わせて幼稚園教育要領の1ねらい、2内容、3内容の取扱い、から新たに加わった内容など、変更された部分（下線で示す）を各領域から見ていきたい。

○領域「健康」1ねらい(3) 見通しをもって行動する。2内容(5) 食べ物への興味や関心をもつ。3内容の取扱い(2) その際、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整すること。(4) 食の大切さに気付き、(5) 次第に見通しをもって行動できるようにすること。(6) 安全についての構えを身に付け、～避難訓練などを通して、

○「人間関係」1ねらい(2) 工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、3内容の取扱い(1) 諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって(2) 自分のよさや特徴に気付き、

○「環境」2内容(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。(8) 自分なりに比べたり、関連づけたりしながら 3内容の取扱い(1) 自分の考えをよりよいものにしようとする (4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。

○「言葉」1ねらい(3) 言葉に対する感覚を豊かにし、3内容の取扱い(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

○「表現」3内容の取扱い(1) その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。

(3) 様々な素材や表現の仕方に親しんだり、

以上の変更箇所に対して、各担当者が具体的にどこに着目し、どのような対応をして、結論を見出したかについて領域ごとに見ていく。

2. 5領域の取組みについて

(1) 健康

今回の改訂においては、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のさらなる整合性が図られた。これにより、幼児教育・保育の「質」の向上が求められている。

本考察では変更部分の、領域「健康」の改訂のポイントのねらい(3)「見通しをもって行動する」、内容の取扱い(2)の「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」、(5)「次第に見通しをもって行動できるようにすること」の箇所に着目した。これらは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(1) 健康な心と体」「(2) 自立心」「(6) 思考力の芽生え」に対応する修正点である。これは「主体的・対話的で深い

学び」とも連動している。生活習慣として主体的に取り組み、自ら行動するプロセスが重視されているのである。

そこで、本保育科「体育」の授業において、学生自身が「主体的・対話的で深い学び」が経験できるように、毎時間の演習で、「何を学ぶのか」を冒頭で意識させ、演習後には「何ができるようになったか」「どのように学んだか」等の振り返りの時間を設定することによって、指導者となる学生自身も「見通しをもって行動する」ことができると考え、授業の構築を試みた。

1) 研究実践について

・授業対象者：「体育（1）」受講者 保育科1年生 58名（A班 29名、B班 29名）

・授業日：2021年7月9日

・場所：柴田学園大学短期大学部中庭

・題材名：「水遊び」

(1) 研究のねらい

「水遊び」の活動について、学生が「何を学ぶのか」を意識し、指導者として「何ができるようになったか」「どのように学んだか」を振り返らせることで、「見通しをもって行動する」視点をもつことができる。

(2) 授業及び経緯

①「水遊び」の特徴、効果、援助の基本について学び、参考指導案をもとに5歳児を対象とした水遊びの活動を計画する（表1）。

②身近な材料から「水遊び」活動の教具を、各自製作する。

③学生が2人1組で、園児役と指導者役を交替で「水遊び」活動を行う。

④ 振り返りを行う。

(3) 水遊びに向けての準備

①参考指導案：保育科2年の体育（2）受講生12名により作成された「水遊び」指導案

②場の設定：簡易プール（ビニール製）3個、個人の水遊び場（かごに300 ゴミ袋を入れ、貯水）15個

③学生による自作教具

(4) 水遊びの活動

- ・活動の流れについて説明
- ・着替え準備等
- ・小さな水たまりを利用した共通の水遊び（2人1組）水に手を入れる、水をすくう、手のひらにためる、水をかき回す、水をたたく、水で音を立てる、水をとばす、水をこぼす、その他各自考えた遊び
- ・各自製作した教具を使つての水遊び（かごの水たまり・プール）
- ・発展させた自由な水遊び（図1・2）
- ・後始末・着替え



図1 自由な水遊び（水の動きを楽しむ）



図2 自由な水遊び（遠くまで届くかな）

(5) 付箋を使った振り返り（図3）

①振り返り（個人記述から）

例・「今日の水遊びを通して、園児に合った水遊び方や、片付け、着替えを考慮した時間の計画などを知ることができました。」

・「先生と子供の気持ちになって、安全に楽しく水について遊べた。」

・「水遊びを久しぶりにして楽しかった。水温+気温を合わせて50度以上で（実施）することを忘れない。」

・「水遊びがやりたい子はたくさん遊べるけど、あまり遊びたくない子との関わりをしっかりと考えて

いかなければならないと思いました。」

・「水遊びに夢中になりすぎたので、夢中になりながらも子供をしっかりと見たいです。」

表1 水遊びの指導計画案

指導計画案 (部分・全日) 実習

柴田学園大学短期大学部 保育科

- 1 活動名 水遊び
- 2 滑動のねらい 水に入らない水遊びの活動を通して、水に興味をもち水遊びの楽しさを味わう。
- 3 活動にあたって 水遊びについては、個人差が大きくスイミングスクールに通いある程度の泳法まで身に付けている子もいれば、冷たい水に触ることが億劫だったり、手や服が汚れることを嫌う子もいる。そこで、水に入らない水遊びの時間を十分にとり、水を使って、すくう、汲む、撒く、蓄えるなどの多様な動きを経験させたい。初めて、水を扱う場合は天候も考慮し、水を使って遊ぶことが心地よい時間帯を選ぶ。水回りは、床面が濡れて滑りやすいため、安全面に配慮し個々の園児に声がけしながら、活動の援助をしていきたい。
- 4 活動の展開

実習園名(柴田ツイヤーズカレッジ幼稚園) No. 1

日時	2021年 6月24日(木曜日)	天候	曇り	実習生名	
対象	5歳児 うめ組 12名(男2名 女10名)			指導者名	
時間	子どもの活動	保育者の配慮	環境・準備		
10:20	○クラス活動(水遊び) ・「海」の歌を歌う。 ・指導者の話を聞く。 ・着替えをする ・ベランダに集まり、バケツの水で遊ぶ ①水に手を入れる ②かき混ぜる ③水をすくう ④水を手のひらにためる ⑤水をどぼす ⑥水に足を入れる ・各自自分の好きな場所で水遊びを楽しむ	・歌っている子どもを観察し、健康状態を把握する。 ・活動のねらいや活動時間、終了後の動きについて見通しがもてるよう言葉をかける。 ・基本的には、自分で着替えるが難しい子には援助する。 ・各自一人の活動ができるよう、用具を準備しておく。 ・①～⑥は一斉に行う。 ・誰がどんな遊びを楽しんでいるか観察し、適宜、言葉をかける。 ・道具を使った遊びを楽しめるよう道具の紹介や、約束事を伝え、実際に行ってみる。 ・全園児の活動を把握しながら、一人一人に言葉をかける。 ・集合場所と次の活動を伝える ・健康状態を確認する。 ・着替えが得意でない子に援助する。 ・全員が揃ったのを確認し、楽しかったことを共有する。	・活動時間確保のため、プールは予め設置しておく。 ・プールは朝から水を入れておく。 ・水温が上がらないときはお湯を入れ調節する。 ・気温+水温が50度以上を確認  ・海や水を連想させる壁面構成 ・事前に保護者に対して、活動を予告し、着替えの準備等の協力を依頼する。 ベランダ 各自のタオル置き場 ◇ 出入口 ○○○○ ○○○○ ○○○○ ◆ 水遊び用具 中庭 □ 中プール □ 蛇口 ※プールの下にブルーシート等を敷く 準備物: ①手かご12個・買い物袋12 ②プラスチックトレイ・ペットボトル等 水てっぽう(大・中・小)シャボン玉 ③自分で作った用具 じょうろ、魚すくい、色水など ・あとかたづけをしながら指導者も着替える。 ・「スイミー」等の絵本(DVD)を準備する。 (高揚した気持ちを静める) ・楽しかったことや心に残ったことをメモしておき、次の製作活動に活かす。		
10:45	・片付けと体の始末 ・ビデオを見たり、絵本を読んだりして、全員揃うのを静かに待つ。 ・楽しかったことを話したり、友だちの話を聞いたりする。	○おどの園児も十分に水に親しむことができた。 ○保育者も子どもと一緒に水遊びの楽しさを共有した。 ○一人一人のかこがあったのでけんかにならなかった。 ○水遊びの活動が楽しくなるような教具を準備した。(穴あきペットボトル・魚すくい・水風船・色水用絵具) ●指導者が楽しくなり、子供(役)への声がけや援助が十分でなかった。 ●子どもたち全員が使用できる数の水鉄砲が必要だった。 ●子どもたちがもっと楽しく活動できるように、道具を工夫すべきだった。 ●水鉄砲をするときのルールを確認しておかなかった。 ●プール設置の位置確認が不十分だった。(蛇口には近いが排水がよくない) ●プールの下が平らなのか、地面の状態確認が十分でなかった。(傾いて水がたまった) ●プールをもう少し、日向に出したほうが良かった(曇りなので、水温が冷たく感じた) ●ベランダの段差がけがに繋がるので、場の設定をしっかりと検討する。 ●全員の水をくむのに時間がかかったので、前もって水をくむなどの改善が必要だ。 ※水遊びは、天候によって左右されるので、しっかりと考えるべきだ。(○は良かった点、●は改善点)			検 印
反省	※この指導案は、学生を幼児に見立てた授業展開のためのものであり、実際の保育指導案とは異なるものである。				

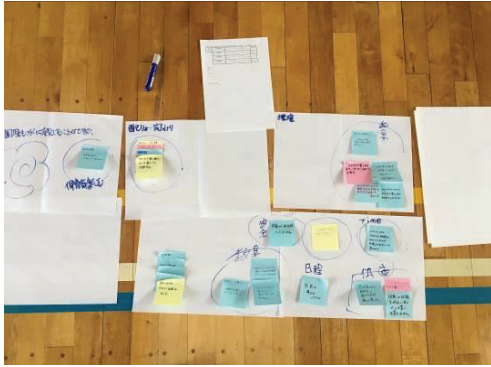


図3 付箋を使用したグループの振り返り

②全体（水遊び活動実施者57人欠席1名）の傾向（複数回答あり・無答なし）

- ・自ら水遊びを楽しんだ（30名）、
- ・水遊びの援助の仕方がわかった（19名）、
- ・水遊び活動中の園児の気持ちを想像できた（8名）、
- ・安全への配慮についてわかった（7名）、
- ・水遊びの種類がわかった（6名）（表2）

表2 振り返りの結果

振り返りの内容	回答数 (57名)
自ら水遊びを楽しんだ	30名(53%)
水遊びの援助の仕方が分かった	19名(33%)
水遊び活動中の園児の気持ちを理解できた	8名(14%)
安全への配慮について分かった	7名(12%)
水遊びの種類が分かった	6名(11%)

2)実践の振り返りと考察

体育（1）の授業において、毎時間、「何を学ぶのか」を冒頭で意識させ、演習後には「何ができるようになったか」「どのように学んだか」等の振り返りの時間を設定してきた。例として取り上げた「水遊び」の演習の終了後の振り返りカードには、水遊びの欠席1名を除いて57名全員の記述があり、1時間の中で「何ができるようになったか」は意識することができたかと捉えられた。また、水遊びの援助の仕方の理解、水遊び活動中の園児の想定、安全への配慮の理解、水遊びの種類理解の記述が合わせて40名あることから、全体の7

割の学生は「水遊び」について実践的に学んだと言える。また、教具については当日欠席者も含めて、全員が制作して活動に臨んでいることから「見通しをもって行動」し、「主体的な学び」が成立していると考えられる。また、自ら水遊びの活動を楽しいと振り返った学生が30名いたことで、仲間の活動から動きを学び、楽しさを共有しながら「水遊び」について実践的に学んだと捉えることができる。

「教育は人となり」と言われる。このような授業を繰返すことで、学生の指導力が向上し、園児が「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整する」ようになり、「次第に見通しをもって行動できる」と筆者は考えている。具体的にどのような技術や資質を身に付けることが、園児の「健康」領域のねらいを達成できるかについては、さらに検討を深めていきたい。

(2)人間関係

領域「人間関係」におけるねらいについて改訂以前と改訂後の比較をしてみると、改訂前の「(2)身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ」というねらいが、改訂後では「(2)身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」と変更になった。これは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(3)協同性」に対応したもので、友達と工夫したり、協力したりすることが強調されている³⁾。

先行研究としては、高畑芳美が保育内容「人間関係」について研究動向を詳細に検討している。そこでは、特に2017年改訂以後、3法令の比較・分析が中心に研究され、近年は保育者養成校での実践的な学生の理解を促すための試みの研究が増加している、という。そして今後は、「具体的な現場の子どもの姿を捉えて見せ、そこに学生自身の体験や人間関係を関与・投影させながら、幼児の「人間関係」を指導・支援できる保育者となるための学びを進めることが、授業の望ましい方向」として示唆されている⁴⁾。筆者もまたそうした見

地に立ち、加わった文言、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わえるようにするためには、教師主導の保育ではなく、一人一人の子供の考えや発想を出し合えるような環境を整えること、また、友達と力を合わせて活動する楽しさが味わえるように、援助することが必要ではないか、と考える。

そこで本考察では、改訂後に加わった点を考慮し、保育者となる学生が人間関係の授業において何を学ぶべきか。これまでの授業の組立てに加えるべき点は何かについて検討したい。

まず第一に、子供と接する保育者としての人間性を高めることが必要である。ここで意味する人間性とは、他者を思いやり対話のできる人間らしさを指す。そのためには、学生同士が思いやりのある、誰とでもコミュニケーションを取れるような人間関係を育むことが不可欠であろう。その手立てとして、グループワークを授業に積極的に取り入れたいと思う。グループワークを通して、気の置けない仲間だけではなく、様々な人と協力し合ったり、意見交換をしたりすることを繰り返す行う。物怖じせず自分の考えを述べるとともに、相手の話に耳を傾ける姿勢を身につけてほしい。

また、それまでに気づかなかった相手の良さに気づき、お互いを認め合うことで、温かみのある人間関係が育まれるであろう。学生一人一人の人間性が高められることが、子供たちの人間関係を健やかに育む保育者となる一歩と考える。

実際の授業の組立てとしては、以下である。

1. 自分自身を振り返り、自己分析を行う。そこで自らの性格や、長所や短所、得意不得意などに気付くことにより、自分の課題は何かを見つめる。

2. 相手を知る、自己紹介カードの作成、アイスブレイクやゲームなどを通して触れ合いをもつ。

3. 様々な人と関わり合いながら課題に取り組む、演習—グループワーク・模擬保育を行う。現場の子供たちの写真やDVDからいろいろな場面の子供の気持ちを読み取る作業をするとともに、その場面において、どのような関わりが必要かを討

議する。具体的には遊びや活動などの場面から、子供の思いを読み取る。また、特にケンカ・トラブルの場面の教師の関わり方について検討する。

第二に、学生自身の基本的な生活習慣の見直しを図ることが必要である。『幼稚園教育要領解説』には「よいことや悪いことに気付き、考えながら行動したり、決まりの大切さに気付き守ろうとしたりするなど、生活のために必要な習慣や態度を身に付けていくことが、人と関わる力を育てるようになるのである」⁵⁾と説明されている。

教師になるという視点から見ると、現在の学生の生活習慣や態度は非常に危ぶまれる点が多いと感じている。挨拶、話を聞く姿勢、話し方（言葉遣い）、約束事（期限）を守るなど、基本的なことが身に付いていないと思われる機会が多い。その現状に目を背けることはできない。子供たちに対して「人と関わる力を育てる」ためには、子供たちの手本となる保育者として、望ましい基本的な生活習慣を身に付けておくことが必須ではないだろうか。人間関係の指導の授業のみならず、教師間の話し合いの下での共通理解のうえ、二年間の課程の中で授業や学生生活全般において、学生に身に付くよう取り組むことが今後の課題である。

教師は、様々な子供と関わりながら一人一人の子供を理解し、その関わり合いの中で、子供のよりよい育ちを願う。保育者に求められるのは、子供を取り巻く周りの人とつながりを持ち、話し合うことである。そこでは、どちらがよいか正しいかを議論するのではなく、多様な見方や考え方があることを知ることによって、自分自身を客観視でき、物事を考えることができるようになることが大切ではないだろうか。学生時代に築く人間関係や、教師や友達との信頼関係は、幼稚園教育要領の「人間関係」の領域における、保育者としての願いと深いところにつながり、影響し合っていく。生活や考え方、生き様などを含めたその人そのもの（全て）が領域「人間関係」につながっていると見えよう。

以上のことを踏まえて、幼稚園教育要領改定後の「人間関係の指導法」の授業を行っていききたい。

(3) 環境

「環境」領域では、新たに2内容に「(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」が加わった。これに関して、3内容の取扱いにおいて、次のように説明がされている。「(4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」⁶⁾、である。(下線は筆者)

「環境」の内容に関しては12項目ある中で、自然に親しむ内容が5項目あり、大きな位置を占めているのが特徴的である。本稿では今回、新しく加わった上記(6)の「地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」に焦点化した。そして2回の授業時間をかけて、「地域の様々な文化や伝統に親しみ」と、「社会とのつながりの意識」が養われる保育の取り入れ方について検討する課題を、授業で実施した。

1) 授業実践について

- ・ **授業対象者**：「環境の指導法」受講者 保育科2年 61名 (A班31名、B班30名)
- ・ **授業実施日**：第1回2021年5月19日、第2回5月26日

地域の文化について学生に問うと、すぐにねぶたやねぶた祭りを挙げる。青森県においては、幼児期からこれらに接してきており、幼稚園等でも既に行事に取り入れ親しんできている実態がある。地域の文化を新たに上げるまでもなく、それらが実施されてきているのである。そうした中で、改めて学生の意識を確認する上で、2回の授業時間を設けた。学生に対して地域文化に広く思いを行き渡らせ、幼児教育への活用についてその取り入れ方をグループごとに話し合わせ、とりまとめる授業である。第1回はどのような地域の文化や伝統があるかを知る。第2回目はその中からいかに幼児教育に取り入れられるかについて、幼稚園

教育要領を踏まえ、具体的にその方法を考案する。毎回、どちらもグループごとに進行係、記録係、発表者を決めて意見交換をし、最後に発表する形態をとった。

2) 考察

第1回目の結果：発表された各グループのまとめから、選ばれた地域の文化や名産を活かした活動、伝統的な遊びなどについて、以下に列挙する。

<A班>

グループ1—こぎん刺し。親子でリンゴカレー。

よさこい披露。めんこ。おはじき。竹馬。

2—神明社(しんめいしゃ)祭り→太鼓を作ったたく。秋田犬がいるところに散歩に行く。ねぶた祭り→教室展示と大型ねぶたの作成。田植え(年長組)。アップルパイをおやつに出す。

3—りんごの摘花、摘果、実すぐり、りんごもぎ体験。シールに絵を描いて自分のりんごを作る。お遊戯会などで音源で使う。

4—きりたんぼ祭り(理由)①子供たちが実際に作る→米をつぶして木の棒に巻きつけて焼く。②作ったものを売る(お金の管理→保育者、商品を渡す→子供)③作る苦勞(楽しさ)、食べてもらう嬉しさを味わう。

5—ねぶた→園での参加活動、地域のお祭りの魅力を知る。りんご園→りんごもぎ→りんごがどのようにつくられているのかを知る。紅葉まつり(ピクニック)→自然を知る。

6—春：田植え、桜もち。夏：ねぶた、園庭で行うキャンプごっこ。秋：紅葉がり、やきいも。冬：スキー、リースづくり。

<B班>

グループ1—弘南電車の見学に行ったり、実際に乗ってみたりすることで、公共の乗り物に興味・関心を持ち、子供たちがオリジナルの電車の絵を描いてみる。

2—津軽凧→子供たちに自由に絵を描かせ、とばす。

3—手がたをとりねぶたを作って、二人で持てるようにする。ダンボールで太鼓を作って踊りもつける。なまはげのお面を作る(ダンボール、画用

紙)。

4—米 (田んぼで田植え)。人参収穫。なまはげ。よされ。アメッコ市の枝アメの飾り付け。

5—きりたんぼ手作り体験。秋田犬ふれあい体験。曲げわっぱ手作り体験。田植え。りんごの収穫。ねぶたの合同運行。金魚ねぶたを作る。

6—りんご収穫体験。カブト粘土。秋田犬と触れ合う。

このように名産を活かした活動や文化については、地域の産物、りんごや米の生産物、伝統工芸や無形文化財、地域の祭りや伝統的な遊びなど多岐に及んだ。他にも、なにもさき踊り、かち渡り、北畠祭り、浪岡高校の空き缶壁画、唐糸御前公園、青池ソフト、うまいち祭、まっこ市、もちっこ市などが紹介された。

第2回目の結果：第2回目には、各グループで前回の内容からさらに1点に絞り、どのように具体的に幼児教育で取り上げたらよいかについて議論した。ねらいを明らかにし、その内容をまとめて発表し合った。以下に各グループの活動名と内容、ねらいの概略を列挙する。

<A班>

グループ1—「親子でリンゴカレー作り」(年長組)：地域の名産であるリンゴに親しませながら、収穫したリンゴを使ってさらに親子でカレーを作り、食に活かす。

2—「親子で田植え」(年長組)：米の発育を体験しながら学ぶと同時に、成長後は収穫し、親子でカレーライスを調理して食べる。

3—「リンゴもぎ」：5～6月頃にリンゴに好きな絵を貼り、秋に親子で収穫する。そして簡単なスイーツを作って食べる。その際、場所はりんご公園で、公共交通機関を利用することにし、社会性を学ばせる。

4—「きりたんぼ祭り」：実際に子供たちが作り、それらを売る。お金の管理を保護者に依頼し、商品を手渡すのは子供で、作る苦勞や食べてもらう嬉しさを味わう。

5—「ねぶた」：地域の文化に触れ、実際に自分たちが行うことで、地域との関わりを知る。個々

に役割を振り分け、実際に製作に関わる。5月から開始し、運行の8月まで長期活動として行う。保護者に協力を依頼する。

6—「リースづくり」(年齢4・5歳)：地域の名産であるリンゴの枝や松ぼっくりなどを材料に使い、親子で協力して作り、親睦を深める。

<B班>

グループ1—「電車に乗って運動公園に行く」(5歳児)：弘南電車に乗って、運動公園で降り、お弁当を食べたり、落葉などの材料を集めたりする。後日、その集めた材料を使って製作する。公共機関を利用することで、社会性を身につけることをねらいとする。

2—「津軽凧」：子供たちに自由に絵を描かせ、実際に飛ばして楽しむ。

3—「立佞武多」：4月から8月にかけて、太鼓を作ったり、女子が踊ったりして練習をし、8月に本番を迎える。教師との共同製作で、教師がダンボールをカッターなどで切り抜き、子供たちには和紙にねぶたの絵を自由に描かせる。伝統文化に親しませることがねらいである。

4—「人参収穫」：実際に人参を畑に植えて、成長の様子を記録し、水やりをして収穫する。そして人参ゼリーを作る。また収穫した時の様子や人参の絵を描く。野菜の成長の様子を観察したり、育て方や育てる楽しさを知る。さらに自分で手作りし、食べるおいしさを知ることがめあてである。

5—「田植え」：田植えから成長する稲の観察を1か月ごとに行い、9月に稲刈りをする。そして、10月にきりたんぼを親子で一緒に作って食べる。植物に興味をもたせるのがねらいである。

6—「カブト岩」：写真を見ながら粘土でカブト岩(深浦町)の形を作る。実際に8月頃スケッチブックを持って電車でカブト岩を見に行く。ねらいは自然の造形を見て何かを感じ取ることである。表1に2回の授業の内容をまとめて示した。

上記のように今回、学生が考えた活動例は、「様々な地域の伝統や文化」について、地域の名産であるリンゴや米、人参などの成長の過程を長期に渡って観察したり、収穫をして、さらにカレ

表1 授業のまとめ

No	提案された活動, 伝統的な遊び (□は2回目の授業で採択されたもの)	活動・遊びを通じて どのような学びが期待されるか
A班 1	こぎん刺し, 親子でりんごカレー よさこい披露, めんこ, おはじき, 竹馬	地域の名産であるりんごを収穫し, カレー作りを親子で体験する。
2	神明社祭り, ねぶた祭り, 田植え アップルパイをおやつに出す	米の発育を体験的に学ぶ。成長後の米は収穫し, 親子でカレーライスを調理する。
3	りんごの摘花, 摘果 実すぐり, りんごもぎ	5, 6月頃にりんごに絵を貼り秋に親子で収穫しスイーツを作る。りんご公園で実施し公共交通機関を利用させ社会性を学ばせる。
4	きりたんぼ祭り	園児がきりたんぼを作り販売する。保護者は金銭の管理を担当する。園児は食べ物を作る苦労と食べてもらう喜びを経験する。
5	ねぶた , りんごもぎ, 紅葉まつり	地域の文化を実際に経験し地域との関わりを知る。個々に役割を担当し制作に関わる(5-8月の長期活動として行う)。
6	田植え, 桜もち(春) ねぶた, キャンプごっこ(夏) 紅葉がり, やきいも(秋) スキー, リース作り (冬)	地域の名産であるりんごの枝や松ぼっくり等を材料に使い, 親子で協力して作り親睦を深める。
B班 1	弘南電車の見学, 電車に乗る	弘南電車に乗って運動公園に行き, お弁当を食べたり, 落葉などの材料を集める。後日, その材料を使って製作する。公共機関を利用することで, 社会性を身に付ける。
2	津軽凧	自由に絵を描かせ, 実際に飛ばして遊ぶ。
3	ねぶた(立佞武多) , なまはげのお面づくり	4月から8月にかけて太鼓を作ったり, 女子が踊りの練習をする。教師との共同製作でねぶたを製作する。伝統文化に親しませる。
4	田植え, 人参収穫 , なまはげ, よされ, アメッコ市	畑に人参を植えて, 成長の様子を記録し, 水やりをして収穫する。人参ゼリーをつくる。収穫した時の様子や人参の絵を描く。野菜の成長の様子を観察し, 育て方やその楽しさを知る。さらに手作りをして食べるおいしさを知る。
5	きりたんぼ , 秋田犬とふれあう, 曲げわっぱ作り, 田植え , りんごの収穫, ねぶたの合同運行, 金魚ねぶた	田植えから成長する稲の観察を1か月ごとに行い, 9月に稲刈りをする。10月にきりたんぼを親子で一緒に作って食べる。植物に興味をもたせる。
6	りんご収穫, カブト粘土 , 秋田犬と触れ合う	写真を見ながら粘土でカブト岩(深浦町)の形を作る。8月にスケッチブックを持って電車でカブト岩を見に行く。自然の造形を見て何かを感じ取る。

ーライスやきりたんぼなどに調理して食すという、一環したプログラムを構成した。しかも親子レクリエーションとして取り入れたケースが多い。また実際にねふた、立佞武多の製作体験と運行までの全てを体験させることを想定し、太鼓や踊りを披露するという企画もある。これも長期の活動として計画されている。さらに津軽凧やリース作りなど、地域の伝統的な遊びを取り入れたり、リンゴの枝を材料にして地域性を活かそうとする。公園に行ったり、自然景観であるカブト岩を見に行くなど遠出をする場合は、公共機関を使って社会性が身につくような配慮がなされている。

最初は個々に挙げられていた様々な項目が、地域の伝統文化のみならず、自然の産物などの成長を一から体験させ、その過程を記録させたり、また収穫をして実際に味わって楽しむという、長期の活動としてまとめられた。そして近くの施設や公園などに公共機関を使って出かけたり、作ったものを買ったり売ったりすることで、社会生活とのつながりを意識させる工夫をしている。保護者の協力を仰ぎ、親子で行う活動として見守りながら指導するという、教師の役割も自覚されている。まさに一過性の活動としてではなく、時間をかけて育てたり、作ったりする様々な体験を取り入れながら、「我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」方法を、身近なところから具体的に考えてくれた。そしてどれも「社会とのつながり」の意識をもつことができるような活動として考案された。

3) ワークシートの考察

このワークシートは、授業後に毎回学生に課し短い感想を書かせているもので、その中から該当する2回分の感想を検討した。

1回目については、「話し合いによって様々なアイデアが得られた」、「他のグループの意見が参考になった」、「自分でも知らなかった地域の文化や伝統がわかった」、「さらに詳しく調べてみたい」、「改めて自分の住んでいる地域に興味・関心をもった」など、肯定的な意見が61名中ほとんどを占めた。

また2回目の感想からは、「子供だけではなく、保護者のことも考えなければならない」、「保護者や地域の方々の協力が欠かせないと感じた」、「手間がかかるが、子供たちにたくさんの経験をさせられるようにしたい」、「具体的に何を準備し、いつ、どこで、どのように実施するかを考えることは難しいと思った」、「一つの活動にしても計画性、企画力が求められる」、「実行するためには場所の許可や細かな準備物が必要で、教師の大変さがわかった」など、活動を考える教師側の視点からの意見も多く出された。

他にも、「幼稚園の記憶が蘇り、その時の記憶は意外にも忘れないものだと思った」、「今20歳になろうとしている自分たちの記憶に残るほど幼児体験は大切で、楽しい思い出になるんだと感じた」、「自分が保育士になった時も同じように記憶に残るようなことをしたい」、「地域の名産や文化を守り、子供たちに受け継いでいけるような保育士になりたい」、「地元を知ることにより地元に興味を沸くので、準備などが大変だが積極的に取り入れていきたい」など、将来の仕事に前向きに取り組もうとする意見が見られた。

4) まとめ

「地域の様々な伝統や文化」は、今回幼稚園教育要領に新たに加わった内容であるが、青森県においてはねふた/ねふた祭りが盛んで、とりたてて伝統文化を取り入れることは新しいことではない。既に幼稚園等でも早くから実施されている内容である。この無形文化財となっているねふた以外にもどのような地域の文化に興味・関心を示し、また幼稚園での指導法に役立てることができるかについて、今回検討したことになる。その結果、学生の出身地である青森、秋田、岩手県などの祭りや名産、伝統や文化について広く取り上げられた。あまり知られていないものも多く、授業でそれらが紹介され、お互いに知見を広げることができた。

また実際の取り入れ方についても、一つのことを長期の活動として捉え、親子で楽しむ活動として考えられた。話し合いの中で、自らの幼児体験が思い出され、幼少期の経験の重要性を認識する

意見も出された。

学生の出身地と関連した身近な名産や伝統、行事、遊びなどの内容が具体的に紹介され、青森、秋田、岩手と3県を中心とするその地域の地方文化が取り上げられた。知らない事柄も多く、お互いに紹介し合い共有できた点は有意義であったと思う。また実践的な取り入れ方についても、実際にその場を訪ね、体験するだけではなく、収穫物を調理して食べたりと、保護者と共に活動する内容として提案された。ワークシートの感想からも話し合いにより、これまで知らなかった多くの文化的な行事や特色などに、理解が深まった点が多く指摘された。さらには教師の活動を取り入れる企画力や計画性、他の人々の協力の大切さにも思いが至っている。保護者のみならず地域の方々の協力に感謝しながら活動したい、という意識も生まれたことは、学生自身の教師としての自覚と、「社会とのつながり」に対する認識も深められたのではないかと捉えている。

今後の課題としては、県内には貴重な重要文化財や国宝などの有形文化財があるにもかかわらず、筆者もそれらに言及することはできなかった。また、領域「環境」の内容が多岐にわたっており、実際の授業全体の中でこうした実践をどのように効果的に位置づけたらよいか、さらなる検討が必要であると考えている。

(4) 言葉

2018年より施行された「幼稚園教育要領」の改訂部分に着目し、領域「言葉」の授業での実践内容について検討、考察する。

幼稚園教育要領では、「第1章 総則」の「第1節 幼稚園の基本」の中で、幼児期の教育における見方・考え方を示すとともに、「…教師は、幼児や人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない」⁷⁾とあり、計画的な環境の構成に関連して教材を工夫することを新たに示している(下線筆者、以下同)。さらに「第2章 ねらい及び内容」の『言葉』のねらいに「(3)日常生活に必

要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」⁸⁾と新たに言葉に対する感覚に言及している。また同章「3 内容の取扱い」では「(4)幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」⁹⁾が新設された。幼児教育において絵本や紙芝居は従来から優れた教材であり、児童文化財である。

本学では領域「言葉」に関する科目『言葉』を1年後期、『言葉の指導法』を2年前期に開講している。0～5歳児の言葉の発達過程等を学んだ後、『言葉の指導法』では学生に実際、絵本の読み聞かせを体験してもらう。お互いなるべく重複を避けながら読みたい絵本を選書し、皆の前で読み聞かせをする。次にどのような活動につなげ、展開していくかを提案し、評価している。本研究では学生の選書の特徴と課題を整理し、本学保育者養成における言語教育の向上に資することとした。

1) 方法

(1) 調査方法

記述式によるアンケート調査

(2) 調査及び分析対象

本学保育科2年61名。

前期科目『言葉の指導法』の中で、調査の趣旨と倫理的配慮について説明を行い、協力の意思を確認後、調査を実施した。

(3) 調査期間

2021年6～7月

(4) 調査内容

絵本の読み聞かせを行うにあたり、①選書した絵本、②選書の理由(複数回答可)、③読み聞かせの教育的効果(複数回答可)を記入してもらった。

2) 結果と考察

① 選書した絵本

学生が選書した絵本は(重複4冊を除き)55冊、紙芝居1組であった(表1)。絵本の初版は1969

年～2021年、対象年齢も0～5歳に及んでいる。初版を年代別に分けると、1960年代が4冊(7%)、1970年代が6冊(11%)、1980年代が3冊(6%)、1990年代が4冊(7%)、2000年代が12冊(22%)、2010年代が22冊(40%)、2020年代が4冊(7%)である(図1)。

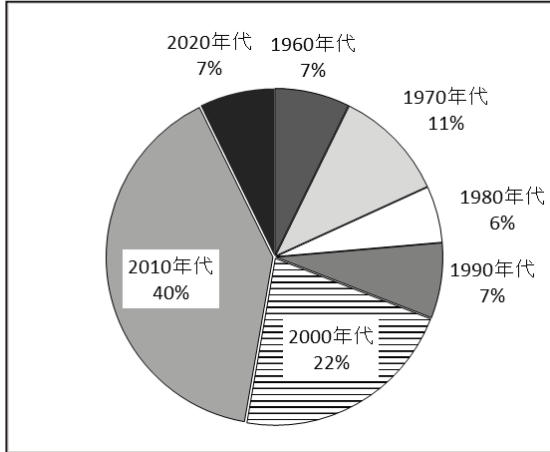


図1 選書された絵本の出版年

対象年齢別に0歳～が3冊(5%)、1歳～が5冊(9%)、2歳～が8冊(15%)、3歳～が34冊(62%)、4歳～が4冊(7%)、5歳～が1冊(2%)であった(幼児とあった絵本は3歳～とした)。よって乳児(0～3歳未満)向けが16冊(29%)、幼児(3歳～就学前)向けが39冊(71%)である(図2)。

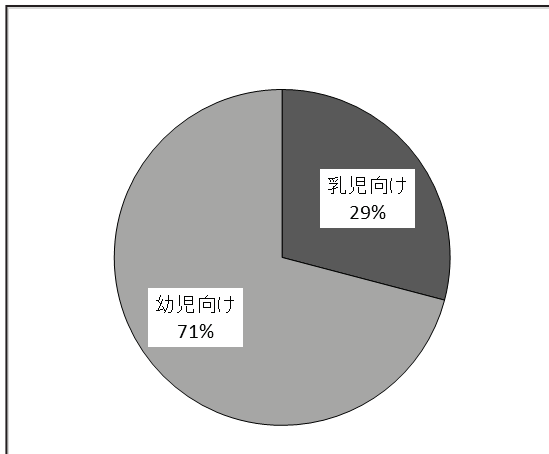


図2 選書された絵本の対象年齢

良い絵本を選ぶ目安として、出版されてから20年以上読者に支持され読み継がれてきた“成人式を終えた本”というのがある。学生が選んだ絵本のうち1960年代から1990年代に出版された17

冊(31%)が該当する。ある意味、本人の趣味嗜好に任せた選書であったが、3割ほどの学生がこの“成人式を終えた本”を選書した。今後、絵本・児童書のレファレンスブックを利用する等、時代の変遷に耐えうる絵本を再認識し、そこから言葉の豊かさを学びつつ、各自の絵本リストを再構築する余地を感じた。また今回の選書では、最終的に乳児と幼児向けの2つの区分を用いたが、現場の子供一人一人の発達段階、聴く力を吟味し、個々の聴く力に応じて、絵本を選書し、遊びや表現への展開につなげる力を養う工夫、実践をはかりたい。

②選書の理由

選書の理由として「あらすじ(ストーリー)」、「絵(イラスト)」、「言葉・表現」の3項目を選択肢(複数回答可)とした。うち「言葉・表現」は現教育要領に挙げられた「言葉そのものへの関心」(言葉の響き、リズム、新たな言葉や表現に触れる)に直結する。「あらすじ」が31名(51.6%)、「絵」が28名(46.6%)、言葉・表現が17名(28.3%)であった。「言葉・表現」を理由に選書した者は3割に満たなかったが、具体的に繰り返しの言葉とオノマトペ(擬音語・擬態語)の面白さ、言葉のリズムや響き(韻)の心地よさが記述されていた(表2)。

表2 言葉・表現を選書の理由に挙げた具体的内容

・リズムを感じる言葉になっている。
・韻を踏んでいる言葉の響きが好きだから。
・繰り返しのリズムが心地よい。
・言葉の繰り返しが思わず声に出したくなる。
・言葉が繰り返されるため、未満児も聞きやすい。
・トリックオアトリートという英語の言葉の繰り返しが面白い。
・必ず「お母さん大好きだよ」という言葉が繰り返しが胸に響いた。
・登場する物の数とその数え方の違いがわかる。
・言葉遊びの絵本だから。
・オノマトペが多い。
・主人公の語り口調が魅力的で話が進んでいる。
・言葉づかいが優しい。
・びよんという言葉が印象的である。
・だじゃれ言葉が入っていて面白い。
・最後のフレーズが印象的で、結末がどうなったのか読者が想像力を働かせる。
・擬音語が秀逸で、独特のオノマトペが使われている。
・擬音語が多く、とてもリズムカルに楽しく読める。間の部分にスペースをとってあり、読みやすい。

一定の学生が絵本の言葉・表現に着目、回答していたが、さらに絵本や物語、言葉遊びに用いられる日本語の豊かさ、美しさを味わい知る創意が必要である。絵本は物語のテキスト（文章）とそのイラスト（図像）が語る総合芸術である。いずれにせよ、文学や造形のセンスをも問われる。子供だからといって、徒に甘ったるい文章、可愛いイラストではなく、日本語の伝統的な調べや語り口、すぐれた文体や物語へ導く美しい絵画表現とはどのようなものなのか、を感じ探りながら、学生自身の絵本を見る眼を養うことが肝要である。

③読み聞かせの教育的効果

読み聞かせの教育的効果を記述式で問うたところ、「想像力が育つ」と答えた学生が16名(27.1%)で最も多かった(図3)。

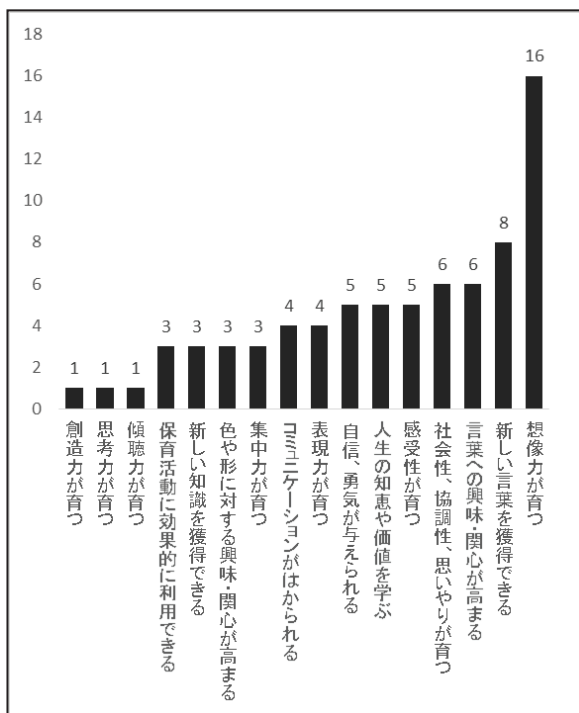


図3 読み聞かせの教育効果

改訂前より現行に至るまで『言葉』の「2. 内容」に「(9)絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」とあるように、子供の世界、遊びにはイメージ、想像力は欠かせない。想像力を育むものは絵本に限らないが、石井桃子は、子供が本（文字）の世界にはいて得る利益として二つ挙げている。一つは、そこから得た物の考え方によって、将来、複雑な社会で

りっぱに生きてゆかれるようになること、もう一つは、育ってゆくそれぞれの段階で、心の中でのしい世界を経験しながら大きくなってゆかれることである⁹⁾。後者は特に、想像力を基盤とするものである。想像力は耳で言葉を聴く体験をとおしてこそ、豊かに養われるものである。この観点からも「想像力が育つ」と答えた学生の意識は当然と言える。次いで、「新しい言葉（語彙・表現）を獲得できる」が8名、「言葉への興味・関心が高まる」が6名と続き、「表現力が育つ」4名、「コミュニケーションがはかれる」4名をあわせ、直接言葉に関わる教育的効果を挙げたのは22名(36.6%)に上り、最も多い結果となった。

学生も絵本のもつ言葉・表現の豊かさを強く感じている。と同時に前述の想像力と言葉は切り離せないものだが、子供たちと豊かな言葉を分かち合うためには、何より保育者、学生自身の感受性、センスが求められている。

3) 総括と課題

幼児が豊かな言葉を身に付けるには、日常生活を共にする大人たちが口にする言葉の質にかかっている。口にする言葉は教えられるものではなく、語り手の気持ちやイメージと共に感じるものである。しかし現在、その大人たちの言葉の貧しさを否めず、特にテレビ等に代表される機械語と騒音語に溢れているのが実情である。2004年に日本小児科医会が「子供とメディアの問題に関する提言」をし、乳幼児へのテレビ・ビデオ・パーソナルコンピュータの影響に警鐘を鳴らしている。さらに2015年、日本小児連絡協議会から「子供とICT（スマートフォン・タブレット端末など）の問題についての提言」がなされ、「スマホで子守りをさせないで」、「遊びは子供の主食です～スマホを置いてふれあい遊びを～」等の啓蒙ポスターが作成された。現在、子供の視力をはじめ体力の低下が指摘されるとともに、メディア依存が進むことが危惧されている。子供を囲むメディア環境が激変する中、絵本の役割はますます大きいと言わねばならない。消費社会とICT文化の背後に、人間そのものの退化、特に感受性の著しい退化が進んで

いる。レイチェル・カーソンは「知ることは感じることの半分も重要でない」¹⁰⁾と語っているが、子供の「言葉に対する感覚を豊かにする」には、聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚の五感を働かせ、

感じる事が土台となっている。

学生の選書の傾向から絵本に対する見方、意識を考察し、特に学生が読み聞かせにどのような教育的効果、価値や意味を見出すのか、それによっ

表1 選書された絵本(五十音順)

No.	タイトル	文(作)	絵	出版社	出版年	対象年齢
1	あけましておめでとう	中川ひろたか	村上康成	童心社	1999	3歳から
2	うさぎのパンやさんのいちにち	かこさとし	かこさとし	ベネッセコーポレーション	2004	3・4歳から
3	うまれてきてくれてありがとう	にしもとよう	黒井健	童心社	2011	0歳から
4	おおきくなったらなりたいな	ひらぎみつえ	ひらぎみつえ	ほるぷ出版	2021	0~2歳
5	大きくなるっていうことは	中川ひろたか	村上康成	童心社	1999	3歳から
6	おかあさん だいすきだよ	みやにしたつや	みやにしたつや	金の星社	2014	幼児
7	おかしになりたいピーマン	岩神愛	岩神愛	岩崎書店	2018	幼児から
8	おともだちたべちゃった	ハイディ・マッキノン	なかにしちかこ	潮出版社	2018	幼児
9	おともだちになってね	岡本一郎	つちだよしはる	金の星社	1999	幼児から
10	おぼけのやだもん	ひらのゆきこ	ひらのゆきこ	教育画劇	2014	3歳から
11	おやおや おやさい	石津ちひろ	山村浩二	福音館書店	2010	2歳から
12	くさをたべすぎたロバくん	アヌスカ・アレブス	アヌスカ・アレブス	BL出版	2021	3~5歳
13	くだもの だもの	石津ちひろ	山村浩二	福音館書店	2006	2歳から
14	クリスマスにはおきててくまん	カーマ・ウィルソン	ジェーン・チャップマン	BL出版	2005	幼児?
15	ぐりとぐらのうたうた12つき	中川李枝子	山脇百合子	福音館書店	2003	3歳から
16	コッコさんとあめふり	片山健	片山健	福音館書店	2003	2歳から
17	地獄のラーメン屋	菊田澄子	西村繁男	教育画劇	2010	3・4歳から
18	しょうぼうじどうしゃじぶた	渡辺茂男	山本忠敬	福音館書店	1966	4歳から
19	しろくまのパンツ	tuperatupera	tuperatupera	ブロンズ新社	2012	幼児
20	ず・て・な・い・で!	わしおとしこ	福田岩緒	教育画劇	2009	3・4歳~
21	ずーっとずーっただいすきだよ	ハンス・ウィルヘルム	ハンス・ウィルヘルム	評論社	1988	幼児
22	ぜったいたべないからね	ローレン・チャイルド	ローレン・チャイルド	フレーベル館	2016	3歳から
23	そらめくんのベッド	なかやみわ	なかやみわ	福音館書店	1999	3歳から
24	だいすきおじいちゃん	きらあかり	きらあかり	東本願寺出版部	2007	4歳から
25	たなばたのねがいごと	村中李衣	えがしらみちこ	世界文化社	2018	幼児
26	たべてあげる	ふくべあきひろ	おおのこうへい	教育画劇	2011	3・4歳から
27	ちいさなくれよん	篠塚かをり	安井淡	金の星社	1979	幼児から
28	ちいさなちいさなすてきなおうち	さかいさちえ	さかいさちえ	教育画劇	2008	2・3歳から
29	ちょっとだけ	瀧村有子	鈴木永子	福音館書店	2007	3歳から
30	どのくらいおおいかっていうとね	舟崎靖子	にしかわおさむ	偕成社	2000	3・4歳から
31	トリックオアトリート! : ハロウィンのえほん	岡村志満子	岡村志満子	くもん出版	2016	幼児から
32	なにからできているでしょーか?	大森裕子	大森裕子	白泉社	2014	幼児
33	なにをたべてきたの?	岸田鈴子	長野博一	佼成出版社	1978	2歳から
34	にんじん (いやだいやだのえほん)	せなけいこ	せなけいこ	福音館書店	1969	1歳から
35	ねないこだれだ	せなけいこ	せなけいこ	福音館書店	1969	1歳から
36	ノントン おやすみなさい	キノノサチコ	キノノサチコ	偕成社	1976	3・4歳から
37	ノントン もぐもぐもぐ	キノノサチコ	キノノサチコ	偕成社	1987	1歳から
38	はじめてのおつかい	筒井頼子	林明子	福音館書店	1977	3歳から
39	はみがきれっしゃしゅっぱつしんこう	くぼまちこ	くぼまちこ	アリス館	2015	1歳から
40	はらべこあおむし	エリック・カール	エリック・カール	偕成社	1976	5・6歳から
41	ばんそうこうくださいな	矢野アケミ	矢野アケミ	WAVE出版	2020	児童書
42	ひとつたぐさん	長野博一	長野博一	福音館書店	1976	幼児
43	びよーん	まつおかたつひで	まつおかたつひで	ポプラ社	2000	0・1・2・3歳
44	ぶたのたね	佐々木マキ	佐々木マキ	絵本館	1989	3~4歳
45	ふまんがあります	ヨシタケシンスケ	ヨシタケシンスケ	PHP研究所	2015	4~5歳から
46	ふみきりくん	えのもとえつこ	鎌田歩	福音館書店	2019	2歳から
47	へんしん トンネル	あきやまただし	あきやまただし	金の星社	2002	3歳から
48	へんてこたいそう	新井洋行	新井洋行	小峰書店	2021	3歳から
49	ぼくのぼしよなのに	刀根里衣	刀根里衣	NHK出版	2018	3・4歳から
50	ほしまんま	みやざきひろかず	みやざきひろかず	ひかりのくに	2012	4~6歳
51	ママがおばけになっちゃった!	のぶみ	のぶみ	講談社	2015	幼児
52	もうぬげない	ヨシタケシンスケ	ヨシタケシンスケ	ブロンズ新社	2015	3・4歳~
53	もじゃもじゃ	せなけいこ	せなけいこ	福音館書店	1969	1歳から
54	わたしうみにいったのよ	糟谷奈美	糟谷奈美	至光社	2019	幼児
55	わにわにのおおげが	小風さち	山口マオ	福音館書店	2010	2歳から
56	わにわにのおふる	小風さち	山口マオ	福音館書店	2004	2歳から

※ No.20は紙芝居である。

て読み聞かせの行為も大きく変化することが窺えた。今後、調査結果を踏まえつつ、学生が絵本に対する理解を深め、見識を広げ、たくさんの絵本を読んで、一人一人が独自の絵本リストを作成し、よりよい教材研究につなげていけるよう努めたい。

(5) 表現

領域「表現」に関しての改訂部分として挙げられるのは「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」、また「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」が新たに加わったことである。これらは幼児期における重要な活動である「遊び」を通して達成されなければならない。そこで「音遊び・イメージ・表現方法・自然・身近な素材」をキーワードに、新聞紙を使った授業を展開した事例を述べるとともに、幼児たちへの実践へと繋げるための考察を行う。また、遊びが表現の原点ならば、保育者としてどのような環境を設定すればよいのか、その関わりと視点についても考察する。

・**授業対象者**: 本学短期大学部保育科1年 「子どもと音楽」受講者 56名 (A班27名、B班29名)

・**授業実施日**: 第1回2021年6月7日、第2回6月14日

・**題材名**: 「新聞紙を使って水の音を作ろう」

1) 授業のねらい

- ①目を閉じ、聞くことのみ集中することで日常生活において無意識だった(あるいは遮断していた)「周囲の音」に気付く。
- ②これまでの経験・体験によって得られた情報を基に、「耳の記憶」を呼び起こし、様々な音を想像(イメージ)することで音に対する感度を豊かにする。
- ③イメージした音(抽象)を身近な素材である新聞紙を用い、「遊びながら」そのイメージに近い音を表現できるよう、創意工夫をする。
- ④表現の発表を互いに聴き合い、その表現の工夫を感じ取り認め合うことで、他者への関心

を持つ姿勢を育むとともに、自己肯定感を高めるきっかけとなる。

2) 授業実践「新聞紙を使って水の音を作ろう」

①導入部

まずは導入として改訂部分を紹介し、自然や身近な音をはじめ様々な音に耳を傾けることが、音楽的資質を育てる第一歩となること、また表現領域では「イメージ」という言葉が他領域よりも繰り返されており、重要視されていることを伝えた。

②ウォーミング・アップ

次にウォーミング・アップとして『音探しの本』¹¹⁾を参考に、目を閉じリラックスした状態で周囲の音を聞くことに意識を向けさせ、自身が気付かなかった音、あるいは多くの人に聞こえた音などを確認した。続いて頭の中で音を想像することを試みた。ここでは目を閉じた状態で「遊んでいる子供たち」や「乾いた枯葉の上を歩く」¹²⁾など、こちらで抜粋し提示したものをイメージしてもらった。

③音作りに向けての準備

ここまでのウォーミング・アップを経て、メインの題材である、身近な音「水の音」のイメージを、身近な素材「新聞紙」で表現するという活動に繋げた。ここでは耳の記憶とその具現化を目的とするため、新聞紙を楽器として見立てた活動ではない。つまり一般的な音楽活動とは異なる観点からの活動である。手順としてまず水にまつわる記憶や体験を、できるだけ具体的に記述してもらった。「水」に関わるもの全般(雨、川、海、生活水など)の記憶について、その時の季節や場所、状況、また自分の気持ちなど、細かなところまで思い出して書くよう指示した。

④音作り

続いて広い空間に新聞紙を広げ、まずは新聞紙に親しんでもらうために、自由な活動を促した。一見「音」と無関係にも思えるこれらの行為も、その全てにおいて音は必ず発せられるし、尚且つこれらの行為を通して新聞紙の持つ可塑性の高さ(造形的、運動的にも)に気付くという点において、なくてはならない過程であると考え(図1)。

続いて先程書いてもらった「音の記憶」のイメージに近い音を探してみるよう指示した。後に幼児たちと共に活動することを考慮し、ハサミやカッターなどの道具は使用せず、マスキングテープや輪ゴムなど危険性の少ない物を使用した。先程の遊びの延長上で異なる音が発せられることに興味を持ち、新鮮な音体験として気付き見出すことを提案した（図2）。



図1 新聞紙を広げ自由な活動をしている様子



図2 イメージに近い音を探る様子

3) 発表・鑑賞会と振り返り

①発表と鑑賞会

各自で創作した「新聞紙による記憶の中の水の音」を一人ずつ発表し鑑賞会を行った。どのような水の音なのかを口頭で述べた後に演じてもらい、それに対する感想を2名ずつに述べてもらった。その際「肯定的な感想を言う」「具体的に褒める」というように、良い点を見つけポジティブな発言をするよう促した。他者に関心を持ち、その行為や表現に気持ちを寄り添わせ認め合うことで、自己肯定感にもつながると考えたからである。

②ワークシートによる振り返り

鑑賞会の後、学生にワークシートを書いてもらった。「音にする際に工夫した点」の項目では「何枚も重ねて大きく重い音になるようにした」「太かったり細かったりとバラバラの大きさに裂いた」といった新聞紙の形状に関して、22名記述していた（図3、4）。また「手を大きく動かした」「波が寄せて引く音を出すためにリズムを付けて揺らした」「床に強く叩きつけた」などのようにパフォーマンスとしての工夫に関し、21名が記述していた。



図3 出来上がった作品の一部



図4 「雨の音」の表現に用いられた作品

「今回の活動に対する感想、気付き（発見）」の項目では「普段はこのような想像や発想はしないのでとても面白かった」「小さな子供でもできると思ったし、大人でも楽しめると思った」「タイトルが同じでも音にする時の新聞紙の使い方が様々で、見ていて面白かった」など、ほぼ全員が肯定的な感想を述べていた。4名が「難しかった」「緊張した」と記述していたが、活動内容には興味関心を持ったようであった。

「他の人の表現に対する感想、気付き」では「自分にはないアイデアで音を出しているのが楽し

かった」「目を閉じると光景が見え、その場面・場所にいるように感じる事ができた」など新鮮な驚きを持って受け止めていた。

「自分自身の表現を通して得られたもの、改善点」の項目では、「水と紙では全く違うものだが、同じような音を作り出すことができるとわかった」「今回は単純なものしか思いつかなかったが、もっと色々な視点で考えてみると新しいものも見つかるかもしれないと思った」「もっと大胆に堂々と表現できればよかった」など、造形的・パフォーマンス的にもさらに工夫できたことや、発想力に関する気づきなどが主に挙げられたが、いずれも他者の発表からの刺激が大きく関わっているものと思われる。

4) 実践の振り返りと考察

今回の活動では自然や生活の音、体験・記憶の中の音などごく身近な音に耳を傾け、音に対する感度を高めること、そして新聞紙という身近な素材を用い「遊びながら」創意工夫をし、音を作り表現することが主なねらいであった。また幼児でも楽しめるような内容と環境を設定した。授業初めのウォーミング・アップは、雑音の多い現代社会において見落とされていた「聴くという行為」を再認識させるための活動である。また音を想像したり記憶の中の音を呼び覚ますことは、「イメージする力」を育むことにつながる。

「新聞紙を使って水の音を作る」活動は、始めは戸惑い懐疑的な学生もいた。しかし、「遊びを通して」というプロセスを踏んでおり、自由でのびやかな発想を引き出せるよう配慮したことで、次第にその中に入り込んでいき、積極的に取り組む姿勢へと変化していった。結果的に「とてもリアルだった」と感じ取れるところまで達成できた。

そして発表と鑑賞で「自分にはない方法」を目の当たりにし、お互い刺激を受け合ったことも本授業の大きな成果である。また「良かった点」を探し合うことは、表現活動においては「正誤」で判断するようなことではなく、一人一人違っている多様な受け取り方とその表現の仕方、その全てに意義があるということに気付く一つの方法であ

った。教師や保育士を目指す学生にとってこのような視点は幼児と向き合う際に必要であるし、また自己と他者との違いに気付くことは幼児期の成長においても重要である。

5) 研究のまとめ

今回の新聞紙による音作りでは、様々な音に集中し、想像力を働かせ、自然や身近な環境、また新聞紙という可塑性の高い素材に好奇心と探求心を持つなど、生きていく上で必要な能力を「遊びながら」育むことができる。またお互いに聴き合うことはコミュニケーション能力の育成にもつながる。さらに「音の表現」のみに留まらず新聞紙による造形活動でもあり、パフォーマンスを伴うため身体感覚の育成にも寄与している。「遊び」は子供にとっても大人にとっても、論理を超えた思考を伴いながら心身の栄養となる。自己と対話し新しい関心が芽生え、自ら探求していく過程は生涯にわたる人格形成の源流ともなっていくものである。

絶え間なく変化し膨大な情報に溢れている現代社会において、問題解決の糸口を情報や知識だけに求めることはもはや困難である。何を選択しどのように行動するのか、未来を予測するのが難しい現代だからこそ、表現活動によって育まれる感性や創造力はこれから生きる子供たちに備えなければならない、人間の能力である。

3. 5領域からの検討の成果

領域「健康」では、着目した改訂内容が、ねらい(3)「見通しをもって行動する」、内容の取扱い(2)「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」、(5)「次第に見通しをもって行動できるようにすること」に注目し、「水遊び」という題材で、それらが実践的に可能となる授業提案がなされた。その成果を分析することで授業実践の効果が実証された。

「人間関係」では、ねらい(2)「工夫したり、協力したり」に注目し、今後実践する授業の組立てとして、3つの試みが具体化された。また授業時間だけではなく、普段の学生生活の人間関係が

大事であり、学生時代に築く人間関係の在り方の重要性が指摘された。

「環境」では、「地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」ことに着目し、まず学生の地域社会における様々な文化や伝統を認識させるべく、グループごとの意見交換をすることで、地域の様々な文化や伝統に親しませる方法がとられた。実際に地域社会における文化や伝統について、幼稚園等で活用できるような取組みが検討された。

「言葉」では、ねらい (3) 「言葉に対する感覚を豊かにし」、内容の取扱い (4) 「幼児が生活の中で、ことばの響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」に対して、6～7月の長期にかけて行った調査を取り上げ、学生が選書した絵本の特徴が詳細に分析された。

「表現」では、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」、「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」に焦点をあて、新聞紙による音作りの実践を通してその結果を分析し、目的が到達された事例が紹介された。

このような具体的な対応により、本大学では幼稚園教育要領の変更部分に対する指導が5領域から試みられている。

おわりに

幼稚園教育要領の変更点に関して、各5領域からそれぞれの視点で、対応が図られている。実際に授業を通して有効な教材化が実証された事例もあれば、これからの実践に向けて、授業の方向性が抽出された内容もある。また、各領域の観点から重要だと思われる各自の見解が打ち出された。今後はさらにこれらの実践を繰り返しながら、学生が発揮したその能力を本来の資質・能力として定着させていくことが必要であろう。そのための効果的な実践方法についてさらに改善すべく、全

体の授業の中で他の内容との関連を図りながら、効果的になされる検討が必要になる。

また今回、個々に各領域から導き出された授業内容について、さらに共同で行うことが次の課題である。幼稚園教育では、5領域の内容が一体化されて指導されることが、その大きな特徴である。どのように領域を連携させ、授業を通して協働できるか。今後本大学における保育科の授業をより充実させる上で、我々教員のさらなる工夫が求められている。

利益相反

本研究に関する利益相反はない。

註及び引用文献

- 1) 文部科学省. 資料3 新幼稚園教育要領のポイント. <https://www.mest.go.jp> (2021年7月1日)
- 2) 文部科学省. 『幼稚園教育要領』. pp. 5-8. フレーベル館, 2017, 参照。
- 3) 高畑芳美. 「法令の改訂に伴う保育内容「人間関係」の研究動向」. 梅花女子大学心理こども学部紀要 11. p. 2. 2021
- 4) 同上書. p. 8
- 5) 文部科学省. 『幼稚園教育要領解説』. p. 167. フレーベル館, 2018
- 6) 文部科学省. 『幼稚園教育要領』. p. 19. フレーベル館, 2017
- 7) 同上書. p. 5
- 8) 同上. p. 19
- 9) 同上. p. 20
- 10) 石井桃子. 『新編子どもの図書館』. p. viii. 岩波書店, 2015
- 11) レイチェル・カーソン. 『センス・オブ・ワンダー』. p. 24. 新潮社, 1996
- 12) R. マリー・シェーファー, 今田匡彦. 『音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション』. p. 3. 春秋社, 1996
- 13) 同上書. p. 48

(受付: 2021年9月28日, 受理: 2022年3月16日)